

花と星へ 嵐と夜から苦悶に耐えて
——ヘンリー・ヴォーン小考（七）——

森 田 孟

ヘンリー・ヴォーン (Henry Vaughan, 1621-95) の『火
花散る燧石』*Silex Scintillans* (1650, 1655) には、既に見
た「探索」[本誌第二〇一号二七—三〇]と「追求」[本誌第
二〇四号三八—三九]以外にも、類似の標題を持つ作品が幾
組か収録されている。今回はその中の五組を取り上げてそ
の姿を凝視してみたい。

まず、次の三篇が注目されよう。出現順に挙げれば、
「驟雨」、「暴風雨」、「嵐」である。「驟雨」は、「私」が投
げ込まれた丘陵には暴風雨と嵐 (storms, and tempests)
で花が萎んで色褪せていた、と始まる作品「人間の墮落と
回復」[本誌第二〇三号二—四]の次に現れる六行ずつ
三連の詩で、A B B C C A の型で押韻し、各行の音節数は

一行目から順に 10 10 10 5 5 10 (若干変化あり) である。

驟雨 The Showre⁽¹⁾

そうだった、私は汝の誕生を見た、あの眠気を誘う〈湖〉⁽²⁾
は

その弱々しい胸から汝を吐き出したのだ、病める水の
病気と〈伝染する〉〈安らぎ〉を。

だが、今 〈夕べ〉となり

天空にとつては余りに高張り

汝は涙となって降ってきて 自らの間違いのせいで泣いて
いる。

2

ああ！そんなのだ 私の場合も、しばしば私は押しつけて

きたのだ

天空に物憂い呼吸を、だが稔りなく これは

貫けなかった、〈愛〉だけが素早く近づくとで(3)

道を開けるのだ

他のものが悉く彷徨う時に

煙(4)が、胸の〈水蒸気〉が。

3

それでも、もし汝が溶けて列なす滴(4)で

〈大地〉を柔かくするように 私の眼が

私の縛られ眠れる硬い心を憂いて泣くなら

おそらく遂には

(そういう驟雨などは過ぎ去って)

私の〈神〉が雨後に〈太陽の輝き〉を下さることだろう。

[M・四二二—二三]

訳注

(1) 「混乱と脆々」“Disorder and frailty” [本誌前々号二〇三
号九—一頁]の訳注 (I) 参照 [M・七三〇]。

(2) That drowse Lake. ウォーンの居住地ニュートン (New-
ton) から約二マイルの所にあるフランゴルス池 (Langorse
Pool) が作者の心には浮かんでいたかも知れない [H・二
三]。

(3) quick access. G・ハーバートの「祈り・二」“Prayer”
(II) 「六行詩四連計二四行の作品、Wil・三七—七
三」の第一行目「どのような素早い近づき方を／なさるの
か：我が尊い〈主〉よ、御身は」を参照 [M・七三二]。

(4) smoke. ハッチンソンはLucretius, v. 464. と比較してい
る [同]。『事物の本性について』第五卷の四六四「湖や
絶えることのない／川の流れが霧をはき、また時には」大
地そのものさえ蒸気をはくのとほとんどかわりない (藤
沢令夫・岩田義一訳)。

天然現象の「驟雨」に、その「誕生」にまで遡って瞑想
を展開するこの詩は、語り手が自らを「驟雨」に準え、愛
の必要を覚って「驟雨」の状態を切り抜けながら、「私」
の〈神〉に雨後の太陽の輝きを恵んでもらう方途をまさぐ
る趣の作品である。涙となって降ってきた驟雨を遣らうに

は「私」も泣いて眼から涙を流して、というのは、巧妙な呼応であろう。驟雨は、豊饒、多産の象徴であり、ゼウスは驟雨となつて、四壁に囲まれて安全だった筈のダナエの中に降り注いだのだった「dev・四二二」。

暴風雨 The Storm

私にはその寓意⁽¹⁾が見えるし分るのだ 私の血は

〈海〉ではなく

浅く限りある洪水なのだ

血のように赤いけれど。

それでも私は血と同じく強い流れを備えていて

山なす波と同じ

渦巻く力で怒号しては シーと唸る

湧き返る川なのだ。

2

しかし私の血の水がこのように押し寄せる時

暗い暴風雨と風は

その水をあの激しい論争へと煽り立てるのだ

さもなければ（そういう気にはな）らない

こうして〈拡大され〉立腹した空気が

これらを掻き乱して洪水にするのだ

しかしそれでも この上なく晴れた天候が

私の血の中に 嵐を産み出す、

3

〈主〉よ、だから私を涙を流す〈雲〉で囲んで

私の心に 突風のさ中にあつても

あの経帷子の下で 嘆息させて下さい

神霊の風を、

そうしてあの暴風雨に追放させて下さい この罪深い⁽²⁾

安楽のせいで汚れた〈世捨て人〉を

そして風と 水を思うがままに使つて

私の魂を洗い、翼をつけて下さい。

[M・四二三―二四]

訳注

(1) use = moral, or application. OEDが廃れた意味として挙げる「F・一七五」、「M・七三三―三四」。尚、後者は、

「アスク川の赤い洪水ほど赤いものは見たことがない」とのウェールズの女性研究家の証言と共に「⁽¹⁾卒の誤植ではないかとの説も紹介。ヴォーンは、赤らんだ空の下での海の暴風雨の光景に感銘を受けたのかも知れない。しかしこの詩の萌芽は次の一節にあるのかも、とフェルサムの「決意」[Fellham, Owen (1602-68), *Resolus* (1623), i. 62, 5th ed., 1634, p.190.] から引用する。「全て〈人〉は広大でゆったりした〈海〉だ。彼の情熱は風で、掻き乱す波の中で彼を隆起させる。どれ程彼は駆け回り、わめき泡立つことか、波に激しく翻弄されて！」。

他に、ヴォーンの「反抗」『The Mutinie』[M・四六八—六九]の六—二行とも比較せよ[M・七三三—三三四]。「私の思考は石などから飛び出す水のように／騒立つ〈経路〉から放れて堤へと／退いたが、そこでは境界で暴れ回り／悲嘆に暮れてぶつくさ言う。しかし私は思考が沸騰するのを感じ／それが〈渦巻く〉のを知っているので／彼に注意を向けるが、彼は哀れな砂にはうんざりさせ／高慢な波を服従させた」。

(2) ここからの四行は、G・ハーバートの「暴風雨」『The Storm』[六行詩三連計一八行の詩、W i l・四六一—六三三]の一七—一八行「詩人たちは貧弱な暴風雨を不当に扱ってきた、そういう日々は最良なのであり／空気を胸の内」に外に「追い払うのだ」と比較せよ[M・七三四]。

「私」の裡なる「暴風雨」を自然界の暴風雨によって追い払い、「私」の魂を洗い浄めて自由に飛翔させて下さいと、〈主〉に希求する作品である。A B A B C D C D の型で押韻し、各行の音節数は順に8 4 8 (第一連は7) 4 8 6 8 6で、心象の強烈な激しい詩。「暴風雨」は、自然の諸要素間の創造性に富む交わりであり、多くの宗教にあつては至高神の顕現を意味する「d e v・四四五」。

同じ第一部に同じような自然現象が扱われる。

嵐 The Tempest ⁽¹⁾

どのように人間は配分されるのか？ 毎時間どのように人間は自らを、何か見るべきものを 示されるのか？ この遅々たる長い熱が、彼には〈教訓〉になりそうだが、それで嵐には内部に 驟雨より多くが備わることになる。

自然は 懐に抱き抱えながら ⁽²⁾

己が 〈幼な児たち〉が死ぬのを見、

己が花々が悉く萎んで藁になり

乳房が乾上ってしまったのを見て

幼な児たちの乳房にして墓である〈大地〉に

空へと溜息をつかせたのだ、

それで遂に自然の子宮から連れ出されてきたこの

溜息に 雨が応えたのだ

それで自然が抱くあらゆる恐怖と

幽かな要求の真只中に

自然の〈眞摯な〉溜息が自らの涙を生み出し

自らの乳房を一杯に満たしたのだ。

おお 人間ならそう出来て欲しい！ 彼なら世間が、

自分に読み聞かせてくれるのが聞えるだろう！ 〈天地創

造〉の際に

振り棄てられ使われまくって気付かれた膨大な費用は

全て人間の眼と耳のための訓戒にしかならない。

確かに この貧しい〈被造物〉の降下を予め知っている

強力な愛は こういう卑しい事物の中に隠されている

慈悲深い術によって罫をかけて彼の心(5)を捉え

〈元素〉の各々に不意打ちを食らわせたのだ。

ここに在る悉くが彼に天国を示し、落下する〈水〉は(6)

声高に荒れ狂い飛び散る。汚れに汚れた泡の〈霧〉は

最初の河床や山を離れ、木々、草々、花々は全て

やはり上へと先を争い昇ってゆき 彼に家路を指し示す。

どのようにそれらは濃密さを棄て去るのか？ 〈大地〉と

〈人間〉だけが(イサカルのように)重荷を喜び、

水は純化されて〈動き〉に、〈空気〉は〈光〉に、

火は三つのもの全てになるが、人間にはそのような浮き立

つ喜びはない。

〈植物〉は根を張って〈大地〉に最も良く〈従う〉し

その〈葉〉は水と湿気に従い

その〈花〉は空気に鋭敏に近づき

種子は合性(7)のいい火が空に従わせる。

全てには各々階程(9)があり 上り道がある、しかし人間は

そのことは弁えているし 独自のものをもっと多く備え

ているが

梯子の足許で眠るのだ、ああ！何が出来るのだろうか
こういう新しく発見されたものは、溺れ死ぬ以外に？

こうして陰と闇の中を這い蹲いながら 彼は

死のような忘却に沈み込む、そして自分の見るもの
全ては（ペリラミッド）のように（この球体から飛び出
し

小さくなりながらも目に見えないまま成長し続けるが

彼は尚も自分の汚物を抱き締めるのだ、彼が手入れし

色を塗り身に纏う物は 彼の両眼を閉ざし

天国は彼が見張っている塵ほどにも美しくはないし
金銭には〈天空〉よりも甘美な音楽がある。

人生は突風にすぎない、彼はそのことは知っている、何だ
って？ 藁

と葦の足枷は彼の短い時間を調節するだろうか？

彼は啜ったり歌ったりしてはならないのか？花は決して
ならないのか 彼の顛顛を飾る冠には？夢が彼の律法にな
るのか？

おお 愚かな人間よ！どのようにして汝は視力を失ったの
か？

どうしてなのか 〈太陽〉が汝にだけ

全くの暗闇になり 汝のパンが石になるなんて？

肉体にはもう柔らかさは無くなったのか？真昼に光がない
のか？

〈主〉よ！御身はここ地上に魂を一つ置いて下さった、も

し私が

再び壊れてしまうなら、というのも燧石は鉄なしには

火を発するわけにはいかないので、おお 御身の力を以

って

もう一度御身の贈り物の曇りを取って この燧石を塵に擦
りつけて下さい！

〔M・四六〇—六二二〕

訳注

(1) G・ハーバートの「悲惨」"Misere"、「六行詩—各行の音
節数は順に8 10 8 10 4 6でA B A B C Cの型で押韻する—

一三連計七八行の詩、W i l ・三五八―六四」の特に三七―四〇、四五―四八、五三―五六、の影響を受けている
「M・七四一」。

「汚れた手が触れるもの全てを／それも最も純粹で優れたものを汚すように／我らの土の心は、我らが屈んで御身への／讃歌を歌う時でさえ、その讃歌の神性をそれだけ減らすのだ」。

「彼はこの美德を好まない、本当に、／彼に彼の汚物を与えて一晩中気儘にさせておこう／この〈説教師たち〉は領いて／飛び出し痛みを与える」。

「そこで星々を光らせておこう／汝は眠るか食事をするかだ。／木の中に作られた優美な休み処を／見ている小鳥は、そこに座るのが常だったが、訝りながら歌う」。

(2) *parcell'd out*. ヴォーソンの「混乱」*“Distraction”* 「M・四一三」の二二―二三行には「(人間)は呼びかけられて放り出される／一声ごとに」とあるが、この箇処にE・ホームズはG・ハーバートの「最後の審判の日」*“Doomsday”* 「各連「離れよ」*“Come away”* で始まる六行詩五連三〇行の詩、W i l ・六四九―五三」の二七―二八行「人間は秩序から放り出されて／全世界へと配分される」と比較する
「M・七四一」。

尚、ホームズは「嵐」の冒頭を捉えて自然の姿は全て人間を説明するものであり、自然の場面の変化は人間の

変化に富んだ内面生活の象徴になっているとも説く「H E i・三三三」。

(3) 以下の二二行は挿入か後書きのもの「M・七四二」。冒頭の四行詩はこの二二行の次の四行詩へ続く。

(4) *do so*. 「やうする」とは二行目の「見る」*“see”* 同。

(5) *snares to gain his heart*. G・ハーバートの「罪・二」*“Sinner”* (1) 「一四行詩、W i l ・一五七―五九」の七一―八行「我らを捕え込む細かい網と戦術／開かれ置かれたパイブル、不意打ち何百万回」と比較せよ「同」。

(6) ここからの四連一六行は、G・ハーバートの「人間」*“Man”* 「六行詩九連五四行の作品、W i l ・三三〇―三六」の第五―七連と比較せよ「同」。

「我らに向かつて風が吹き／大地は休み、天は動き、泉は流れる。／何も我らには見えずとも我らに善なれというもの／我らの喜びとして、もしくは我らの宝として、／全体は我らの食べ物の戸棚か／快樂の陳列棚だ。」「星々は我らを寝台へ導く／夜は帷を引き、それを太陽が引つ込める、／音楽と光は我らの頭を治療する。／全てのものが我らの肉体に親切を尽す／降下して本質となる際に、我らの精神には／上昇して大義となる際に」。

「ものは各々義務に満ち／水は一体となって我らの道案内となる、／際立っているのだ 我らの住まいは／下では我らの飲み物が、上では我らの食べ物が、／両方とも我ら

の清潔を成す。水はそれ程の美を備えているのか？／それならどれ程あらゆるものが見事に整っていることか。」

- (7) *Isachar*. ヤコブ「とレアとの五番目」の息子イサカル〔創世記〕30・18は、「二つの重荷の前にしゃがみこむ強いロバ」〔創世記〕49・14―15）だと言われる〔F・二二三〕。

- (8) 一六五〇年版にはここに星印があり、右の余白に「*Light, Motion, heat*（光）、（動き）、（熱）とあった。ヴォーンの「信仰」〔*Faith*〕〔M・四五一〕の三四―三六行には「自然の（太陽）の中のこれら三つ／光、動き、熱のように／今（信仰）（希望）（慈愛）が／彼を通して（完璧に）なる」とある。尚、G・ハーバートの「星」〔*The Star*〕〔四行詩の八連計三二行の作品、*W i L*・二六七―七〇〕の一七―一八行には「それから我らの三幅対の光／動きと熱で…」がある〔F・二二三〕。

- (9) *kygs*. 音楽の場合のような「音階」、秩序立った継起〔M・七四一〕。

- (10) G・ハーバートの「悲惨」〔*Misere*〕〔本詩注（1）参照〕の五九―六二行「しかし（人間）は正に知っている／あらゆるものが流れ出す泉を」／それでも彼はそのことを知らないかのように／彼の知識は明滅し、自らの気質に支配力を振わせるのだ」〔同〕。

尚、この辺りに言及したホームズの見解〔*H e i*・四

七〕をベセルは次のように整頓している。ヴォーンは同時代の人々のようには（^{フレイド}「*罪*」）に悩まされていないと観るホームズだが、それでも彼女は、ヴォーンにとって人間の適切な位置は、物質と精神との接点であって天使より些か低い地上の王子といったところであるものの、人間は生物の梯子の足許で眠る存在であることに注目しているのだと〔*B S*・一五二〕。

- (11) G・ハーバートの「悲惨」の四五―四六行〔前掲注（1）〕参照〔M・七四一〕。

- (12) *money*… G・ハーバートの「^{当つたり}」〔*The Quip*〕〔四行詩六連計二四行の詩、*W i L*・三九四―九七〕の第三連と比較せよ〔同〕。「それから（金銭）が来た、静かにチャリンと鳴りながら／これは何の調子なのか、哀れな人よ、と彼は言った／私は君が技術を示した（音楽）の中に聞いた／しかし御身は、（主）よ、私のために答えて下さるでしょう」。

- (13) *Lifes*… G・ハーバートの「悲惨」の五一―六行「人間は草にすぎない／彼はそれを知っている、グラスを満たせ」と比較せよ〔同〕。

- (14) *bull-fish-fetters*. 「出エジプト記」2・3（幼児のモーセがバピルスの籠に隠されて葦の茂みに置かれる条）、「イヤヤ書」18・2（バピルスの舟を浮かべて使節を海の向うに遣わす）、〔同〕58・5（葦のように頭を垂れ…）など参

照。

- (15) G・ハーバートの「鉄の首枷」"The Collar" [全三六行の詩、W i L・五二四—二九]の一三—一五行参照 [M・七四二]。「その一年は私には唯、失われているのか？／私にはそれに冠する月桂冠はないのか？／花々ははないのか、花冠の華やかさはないのか？」。

- (16) O foolish man!... G・ハーバートの「悲惨」の四九—五〇行「おお愚かな人間よ！そなたの眼はどこにあるのか？／どのようにしてそなたはその眼を失くしてしまったのか 一群の心配事の中で」を参照 [M・七四二]。

- (17) flesh no softness... 著者の（自らを表わす）「標章」 [M・三八六]、「石だったものが肉になる」 [本小考（三）一四]。

- (18) flint... この詩集の標題「火花散る燧石」の説明になっている [M・七四二] [F・二二四]。ヴォーンの散文「闇の中の人間」"Man in Darkness" に、夜は思考の母と言われるが、私は付加したい、そういう思考は、「星」であり闇と格闘する魂から発する〈閃光〉であり雷光である」とある [M・一六九、三]。同じく「火打ち石である心から涙と同情を引き出す」 [M・一七三、三—三三]。ヴォーンの別の散文「節制と忍耐について」"Of Temperance and Patience" には「ある神聖な光線」が逆境では〈魂〉から飛び出すのだ、打ち碎かれた火打ち石から発する火花のよ

うに」とある [M・二四九、一〇—一一]。

- G・ハーバートの「鍛錬」"Discipline" [四行詩八連計三二行の詩、W i L・六二〇—一三]の一九—二〇行「愛すれば／石の心が血を流すのだから」も参照。英国の諺に "In the coldest Flint there is hot fire" (最も冷たい〈燧石〉に熱い火がある) もある [M・七二七]。

〈自然〉の形態を模倣し、従って〈自然〉が人間の生活で模倣される有様を示す詩の一例 [S・一五四]であるこの作品は、〈神〉の支配する宇宙での人間の位置、あるいは姿の探索から始められ——シモンズの言葉を借りれば「基本的に神人同性論を想定していることを表明し、一自然現象の積義を明白に約束する」のが第一連 [S・一五六]——人間が自然から何を学べるかを告げようとする [W G i・一八六] のに、嵐が言わば使用されるのである。

ヴォーンは「自然の中に愛を、そして、〈神〉の言葉の書物を〈神〉の仕事の書物で解釈する仕方を、見出し出した」 [W G i・一八六] のだとウィリアムソンの言うこの詩は、多くの訳注も示すように、語り手の連想が火花のように飛散しながら展開された挙句、最終連で、この詩集その

ものの成立事情を改めて告げようとする。A B B Aの型で押韻する各行共十音節の四行を一連とする十二連に、八音節と四音節の詩行が六行ずつ計十二行で、A B A B C D C D E F E Fと押韻するイタリツク体部が四行詩の第一連と第二連の間に挿入される全六〇行の作品。

ヴォーンの心と眼は、晴れた夜空に向かつて、星と星座に瞑想を誘われる。詩集の第一部終り近くと、第二部の初め近くに、それぞれ次の作品が現れる。

星座 The Constellation

美しく秩序立った光よ（その騒音なき動きは⁽¹⁾

あの真物の〈喜び〉そっくりだ

その源泉はそなた自身が育ってくるあの丘にあり

我らがここ下界で時々味わうものだ

何とまあ従順を絵に画いたようにそなたは動くことか

今 下方をかと思えば次は上方を

そして広大な連鎖を示して見降ろすことか

真黒な夜を ぴったり閉った隅を！

ある夜は楽し気な〈東〉にそなたを見かけ、

〈西〉近くに見る夜もある、

私には見えない時もやはりそなたは輝いて

限りなき境界線を探し回る。

沈黙と光と不眠が そなたには

伴い、〈糸口〉⁽²⁾を巻き戻してゆく、

睡眠も怠惰もそなたを襲わないが 哀れ人間は

やはり眠るか 自らの短い生涯をうっかり過⁽³⁾す。

彼はここ下界で手探りし 休むことなく〈注意〉を払って

まず罌を作り、それからそれにしがみつき

死せる塵^{アブド}を讃え 〈穀物〉と牧草を熱望するが

天国を自らの酒^{グラス}にすることはめつたにない。

音楽と笑いさざめきは⁽³⁾（ここに音楽があるととして）

彼の歳を捉えて調整する、

こういう事柄は彼には〈親しく〉て持っているべきなので

彼は跪くか囁くのだ 人生は狂っていると。

おそろく幾夜かは 彼はそなたを窺つて凝視し覗き見る
眠るのが最も相応しい時に、

ずうずうしくも〈効果〉を知つて〈判断し〉てからずい分
になる

彼の踏みしだく牧草はもつともつと多くを知つてい
のだが。

しかし彼は捜し求める そなたの〈従順〉を〈秩序〉を

〈光〉を、

そなたの穏やかな操作の行き届いた飛翔を、
そこでは その輝きは各々の星で異なるもの

それでもやはり平和が在つて戦争はないのでは？

そなたをその名で呼ぶかたによつて そこにそなたの

炎の全ては据えつけられたのだから

そなたはどのみち〈指令〉なしには決して行動せず

己が〈軌道〉で戦つたのだ。

しかしここ下界では黒い身勝手に〈委託されて〉

息子たちがその父を殺し

〈子供たち〉はその母を〈追跡し〉て、母に与えている
傷を癒そうとするのだった 泣き叫びながら熱心に。

それなら彼女の血と涙をそなたの書物に〈振り撒く〉がよ

い

そこでは血と涙が流は行やらうとして

丁度あの、〈龍の〉声を備えていた〈子羊〉⁸がおとなしく

みえても その騒音のせいで存在を知られてしまふよ
うに。

こうして我らの煩惱によつて混乱の余り戦争となり

我らの案内人は彷徨う星だと判明するが

それはこういう霧と黒い日々⁹に備えて取つておかれたのだ
何時^{いつ}我らが最初の愛から逸れたにしろ。

それでもおお、今 そなたの側^{そば}に座つている人のために

勝利の冠を戴はいてゐる者皆が

我らはこの〈闇〉の中でずっと導いてくれるので

我らはますます昼日中を愛するようになり、

心を落ちつかせ安定させられるので 我らは

秩序正しく平和に愛しながら動いて

そなたの〈被造物〉全体によって従順を教えられ

慎しい敬虔な国民になれるのだ。

そなたの配偶者に与えよう 申し分ない清らかな衣装を

美を神聖さを、

そしてこれらの〈綻び〉を修繕しよう 人々が見て

言えるように、〈神〉の御座^おします所、全て同意すと。

[M・四六九—七〇]

訳注

- (1) *Hemetica, Libellus*, VIII. 4 (ed. W. Scott, i. 177) の次の一節「天界の神々の身体は、あの、初めに〈父〉によって割り当てられてきた秩序を、変化させることなく保つのだ」、及び「オリウ山」の中の「朝の祈りのための警告」*“Admonitions for Morning-Prayer”* の一節「…〈星々〉の〈秩序〉と全ての星が幾つかの場所で自らの〈造物主〉を讃えている有様とを〈瞑想す〉べきだ」を参照「M・七四三」。

- (2) *Chie*: 字義通りには「糸」、譬喩としては「案内」「方向を教える鍵」[F・二二六]。

ヴォーンの詩「サンデイズ」*“Sun-days”* (M・四四八) の二—二二行「天の川は〈太陽〉の輪郭を〈チヨークで描いた〉／誤りを誘う時間の中を導いてゆく〈糸口〉を」、及び、同じくヴォーンの後年の詩集「甦^{よみがえ}ったタレイア」*“Agelaiya, Euphrosyne”* と共に美の三女神の一人で花盛りの象徴』*“Thalia Reinhiva”* (1678) 所収の「世界」*“The World”* の二行目「君の考えを、他の考えを導く〈糸口〉へと巻き戻す」を参照「M・七四三」。

- (3) *Musick and mirth*. G・ハーバートの「真珠」*“The Pearl”* 「一〇行詩四連計四〇行の詩、WIL・三二〇—二七」の二四行目「笑いさざめきと音楽の意味するもの」参照「同」。

- (4) G・ハーバートの「人間」の四三—四五行「更に多くの召使いが〈人間〉に仕える／それで彼は気付くだろう、どの小道でも／彼は自分に深く親しくしてくれるものを踏みしだく」参照「同」。

- (5) 「コリント人への手紙」一、15・41「星々の間でも輝きには違いがある」[F・二二六] [M・七四三]。

- (6) 「詩篇」147・4「主は星々の数を定め、それぞれ全てに呼び名をお与えになる」[F・二二六]。

- (7) 「土師記」5・20「諸々の星はその軌道でシセラと戦っ

た」〔M・七四三〕〔F・二三六〕。シセラはヤビン王のカーン軍勢の長であったが、カイン人へベルの妻ヤエルの許に避難して天幕に匿われて熟睡中、彼女に殺された（「士師記」4・17―22）。

(8) Lamb... Dragons voice. 「ヨハネの黙示録」13・11「もう一匹の獣は：子羊に似た二本の角を持ち、龍のようなもの言いをした」〔F・二三六〕〔M・七四三〕。

〈神〉から祝福されたと感じられる時の真物の〈喜び〉を人に与えながら静かに動く星座に呼び掛けて、人間との対比に思いを到すこの語り手の瞑想は、例にして例の如く一瞬一瞬、バイブルの中の挿話に、尊敬する先人G・ハーバートの詩句にと飛びに飛んで、それらを嵌め込み、言及して目覚ましく、星座の光のようにきらめくが、主題はしかしやはり「人間」考察である。A A B Bの型で押韻する四行連で、各行の音節数はどの連も全て順に10 6 10 8を保つ整然たる作品である。

星 The Starre⁽¹⁾

何であるにしろそれは 下界のここでは美しいので

そなたはこのように惹きつけられて流れ出し流れ続けて

曲がりくねり渦巻き⁽²⁾、目くばせし微笑み

その道を変えながら欺くのだ、

そなたとの親密な交際は決して私の今の探索を

妨げたりしないが、というのも〈鷲〉の眼は星のように

輝かないからだ

それでも劣ったものは 最上のものと

最も優れたものによって 祝福されているのだ、

だが、生存し在り続けるものは悉く

〈^{ディヴァイニティ}神〉から各々の〈指示〉を受けて 我らに

義務を教えるのだと分っているの 私には

どういう人がそなたから学べるのか分るつもり。

先ず、確かに、甚だ尊重されていた〈主題〉は

見事に処理された、というのも一度病気に感染したり

墮落したり死んだ肉体は そなたの

支持や同情を得られないのだから。

次に、そこにあるのは そなたの明るく輝く活力溢れる⁽³⁾
火への絶えまない純粹な欲求と憧憬であり

満たされることは決してないだろうし

歪められたり振られたりされない欲望なのだ。

これらは甚だ強力に動いて 一晚中

そなたの光と愛とに作用する〈磁石〉なので

美しい形が 我らには何故だか分らないものの、

眼を支配して導くのだ。

というのも欲望が、天上界の純粹な欲望が、

根を張り、成長し、活気を無くしたりしない所では

〈神〉が〈交際〉を申し立てて注ぐのだ

自らの〈秘密〉を彼らの頭上に。

これが彼が切望する〈心〉であり、その心が唯、それを
彼に与えたいと思ひ 惜しまないのだ。彼は感じる筈だ

〈神〉は真実なのだ、目に見えない香草が

若々しさと緑を身に付けているようにと。

〔M・四八九—九〇〕

訳注

- (1) Thomas Vaughan, *Magia Adamica*, 1650. 「読者へ」の次の一節、「それから〈天〉を見上げてみよう、〈天上の〉火が速やかに輝いて〈円環〉を描きながら動くのが見えたら考えるがよい、下方に何か冷たい〈天然の諸要素〉が存在しており、それを見降しながらあの火が周りを絶え間なく動き続けて、熱して、作り出しているのだと。」及び、同書の六八ページ、「有り態に言えば、〈天〉自体は元来〈下位の所〉から引き出されてきたものだったのであり、〈天上の自然界諸要素〉の全体ではないものの或る部分は依然として下方に留まったままであり、〈本質〉と〈実体〉上は、分離された星々や空と全く同じものなのである。」を参照〔M・七四七〕。
- (2) G・ハーバートの「星」"The Starre"〔四行詩八連計三二行の詩、W i L・二六七—七〇〕の二五—二六行「それ以外のもの間で私は同じように／輝き、渦巻いて曲りくねることだろう」と比較せよ〔同〕。
- (3) この節、ヴォーンの「恩恵」"The Favour"〔M・四九二—の七一—八行、及びその注参照〕〔同〕。

訳注の文章からも判るが、天上の星も下界から発してお

り、星が〈神〉の意を受けて人間の心身を支配しているという認識に語り手は基づいているので、星「の光」は地上を流れるわけだ。この作品は、〈神〉を真実だと感じるにはどうすればいいか、と考え続けている。A A B Bの型で押韻し詩行の音節数は順に10 10 8 6（第四連は11 11 8 6）である。

ベセルは、「星」の最後の二連に特に言及しながら、〈神〉と魂「人間」との、香草と星々との、交流は、共に「神に支えられた宇宙の、多様性の中の統一性」であるから、寓喩は寓喩以上の敬虔な寓喩になると述べる「[B・一四九]」。

第五連は、ヴォーンの「恩恵」との関わりに、訳注(3)が注意を促すので、ここでその作品を見ておこう。八音節詩行二二行がA A B B C C D D E E E Eと押韻する。

恩恵 The Favour

おお 御身の明るい様子！ 御身の愛に満ちた視線が⁽¹⁾
示されている、それも私に示されているのだ 上から！
めったにない様子！ 求めずして恥しがり屋を

射止めるような喜びを分かつことが出来て

彼を嘆き悲しませ憤慨させ、死なせるとは、

御身の眼には飢えた〈鶯の子〉のようにみえるものを。

ここに在る或る種の薬草は 低く遠くではあるが⁽²⁾

待ちかまえていて 各々の愛する星を知っているのだ。

おお 星に御身と肩を並べさせたりしないでおこう！

私より役立つ薬草など無いように！

それなら私の夜な夜な朝な朝なは成る筈だ

光輝く御身の時間に、見るための私の時間に。

[M・四九二]

訳注

(1) 冒頭の二行は、G・ハーバートの「一瞥」『The Glimpse』

「八行詩三連計二四行の詩、W i L・五八八—九一」の一

七—一八行「もし御身の最初の一瞥が甚だ強力だと／浮かれ気分は開いただけで再び閉ざされてしまふ」を参照

[M・七四七]。

(2) この七—八行は双生児の弟トマス・ヴォーンの『光より

出づる光』*Lumen de Lamine*, p. 8. 「下方のここには〈薬

草〉はないが、彼は上方の〈天〉に星を所有しているので、その星が自らの〈光線〉で彼を打って〈生長せよ〉と言

う。」を参照「M・七四七—四八」。

ヴォーン作品の語り手には、星は〈神〉の恩恵を感じさせるものなのである。

以下、今回の対象にした類題作品の対を三組、ここではその個々の姿だけを見ておきたい。

花冠 The Garland

そなた、下方のここで盛大に流れているが

そなたへと 落下する星が九日間燦然と輝き

何かしら儂い美しさも壮麗極まる見ものとなるそなたよ、
耳を澄して以下の物語を活用したまえ。

初めて 私の若さ溢れる罪深い時代が

我が道の精通者へと成長して

私の〈年譜^{ペイジ}〉には誤りを

私の日々には闇を定めた時、

私はさっと飛び出して 激しい感情丸出して⁽¹⁾

大声で叫び 楽しみを

求めて馬を駆り立て 試そうと努めたのだ

指示してくれそうな賭博師を悉く。

私は火と戯れて 助言を撥ね除け

人生を私のありふれた元手にした。

しかし 思ってもみなかったのだ 火が燃えようとは

あるいは魂が痛みを覚えようとは。

誉れ高き策略、金びかの霧、

偽の喜び、気紛れな飛翔、

絹の縁取り付き粗布喪服、⁽²⁾

こういうのが私の主な楽しみだった。

私は選り抜きの木陰を探し求め 泉に入り浸り

花々を摘んでは我がために花束を作った、

我が気儘な気分と思うさまの翼を与え、

我が頭上に〈薔薇〉⁽³⁾を冠とした。

しかしこの〈生涯〉の最盛期に

私は一人の死者に出逢ったのだ、

彼は私の己惚れた〈態度〉を十分見極めて

私に こう言い始めた、

いい気な愚か者ぶりもいい加減にせよ、元通りにはな

らないのだよ

汝が昼日中のために切り取ったものは
夜には萎れ、この〈太陽〉と共に

すっかり衰え消えてしまおうのだ と。

この世界で集められた花々はここで死ぬ、もしそなたが
萎れない花輪を手に入れられるなら それを育もう⁽⁴⁾

それもそなたのために育もう、それをここに取っておくの
だから見つかるだろう

〈花冠〉が、雨も降らず風も吹かない所に。

〔M・四九二―九三〕

訳注

- (1) G・ハーバートの「クリスマス」“Christmas”〔四行詩
三連+二行の一四行に、二〇行が加わる計三四行の詩、W
i L・二九〇―九四〕の冒頭三行「楽しみを求めて或る日
私は馬を駆った／人馬一体となって、心身を疲労させなが
ら／感情丸出ですっかり彷徨った」と比較せよ〔M・七
四八〕。

- (2) sackcloth: 服喪とか悔悛の印として着用する粗布の衣服。
粗布を身に纏い、頭に灰をかぶるのは、旧訳聖書時代の改
悛、悲しみの印であった。「マタイによる福音書」11・21、

「エステル記」4・1、「サミュエル記」下3・31、などに
その記述がある。ここまでの三行、〈撞着語句〉の羅列。

- (3) ヴォーインの詩「歓喜」『Poetry』〔M・四九二〕―本誌次号
掲載―の六行目に「薔薇」の冠を戴いた「死」の頭と
ある〔F・二八二〕。

- (4) ヴォーインがラテン語から翻訳した『ノーラの司教聖パウ
リヌス』〔三五三?―四三二〕の「読者へ」〔M・三三八〕
は、「天国」と〈不滅〉の美を愛する人になら、以下は、
あの光の家に入り込むための案内人となるだろう。現在の
地上はとてもしめるものではない、墮落しており、呪い
で毒されている」と始まるが、その最後の箇処に同趣旨の
文がある〔M・七四八〕。

ABABBの型で押韻する四行（音節数は10 11 10 11）と、A
BABCDCD:と押韻してゆく二八行（音節数は8 6 8 6
と反覆―例外2行）に、最後のイタリック体四行（音節数
は全て10）が付いて計三六行の作品である。

『火花散る燧石』の第一部の最初の作品「再生」〔本誌第
二〇一号一八一―二〇〕の第6連には、「灌木の茂みという茂
みは／花冠で飾られる」と、「花冠」は既に出てきていた。

花輪 The Wreath

私は大抵 暴風雨に巻き込まれていて

めったに花を生産しなかったので、

どうして御身のために花輪を手に入れられようか

これほど酷い不毛の時代から。

〈春〉のもっと柔らかな衣服

とか 〈夏〉の終り頃の品々を

私は御身の神殿のために持参したりしない

そこは〈薔薇〉ではなく〈棘〉を纏っているのだから。

しかし悲嘆と賞讃を編み込んだ花輪を、

賞讃は涙で汚れ、涙は再び

露けき日々のように喜びで輝いているが、

それを今日 私は持参する 御身の苦痛にも拘らず、

御身の故なき苦痛！ しかも死の如く悲しいが

それを 悲しみがこの上なく虚しく育み、

（おおいや虚しくはない！）今や御身の息遣いを請い希う、

生命を掻き立てる御身の息遣いを、それは喜々として向か

つてゆく

この上なく悲しい雲を通り抜けて あの喜ばしい所へ、

そこでは雲一つない〈聖歌隊〉が涙を流さず歌っている、

歌っているのだ 御身を正当に讃えながら、御身のお顔を

仰ぎ見て。

〔M・五三九〕

花が、花輪が話柄であっても、冒頭に暴風雨が出てくる。前半部二連の偶数行四行が六音節以外全て八音節行でABの型で押韻（後半部一行欠）する。「花冠」と「花輪」は共に詩集の第二部に収録されている。

次の「苦痛」と「苦悶」は、前者が第一部に後者が第二部に現われる。「苦痛」は五年後には「苦悶」になった。

苦痛 Affliction (1)

平穩、平穩。それはそうではない。汝は呼び間違えている

己が〈医術〉を、己の病の〈発作〉を

安定した健康へと変える〈丸薬〉を、

これは素晴らしい〈秘薬〉であり変えるものだ 胆汁を

葡萄酒にそれも甘口のに、〈貧困〉を富裕に、

そして人を うろつき回っていても家庭に連れ戻すもの。
彼は昼間命令を下していたのだが

夜も命令を出したのだから？

そして上級の世界で彼は示すのだからか

下級の世界で見せるものを？

肉体は全て〈土⁽³⁾〉だと、汝は知っている、しかも〈神〉は

いつもの筈を使い

霜と驟雨を実り豊かに〈変えること〉で

汝の諸々の力を慈しんで結びつけるのだと、

汝は雑草へ薊へと すっかり散らばってゆき

己の詩よりも更に野育ちとなる、

病気は健全なものであり、〈十字架〉は唯 大轡⁽⁴⁾となつて

驟馬を 御し難い人を 抑制し

それらは天界を耕作し 名だたる箕⁽⁴⁾となつて

〈粉殻〉が乱す地表を浄めるのだ。

年中絶えず〈太陽が輝い〉ていたら 我らに

花々は恵まれる筈もないだろう、

全ては乾⁽⁵⁾上がり瘦せ衰えて 我らに

木陰を作る木もなくなくなるだろう、

美は色彩の中にあり、最良最上とは

固定しておらず 飛翔し流れゆくもの、
定着した〈赤〉は退屈なもの、静止した白なら

どこか病んだところを露⁽⁶⁾にするだろう。

有為転変が全ての勝負を左右するので、

動くものや 名のある

ものはその限りでないが、

そしてこの輪に仕えるのだ、

王国にもまた各々の〈医術〉があり、鋼鉄と

交換するのだ 己が平穏と毛皮とを。

こうして〈神〉は乱調の人を〈調整し〉て

(他の誰にも出来ないことだ)

その人の胸を高鳴らせたり鎮めたりし

神聖にして必要な技術を

弦のように駆使して あらゆる部分を引き伸ばし

全体をこの上なく〈美しき音調に〉して下さるのだ。

[M・四五九—六〇]

訳注

(1) 次を参照せよ。ヴォーンの「聖餐式」『The Holy Communion』

ion。[M・四五七—五八]の一一—二六行「存在するか生

きているものには／自らの〈活力〉はないし救われぬ／御身の手が開いたり閉じたりする時／〈切り傷〉と治癒、／闇と日の光、生命と死は／御身の息遣によって翻る木の葉にすぎない。」

Fellham, *Resolves*, i. 41. 「全てのものは抑制されている」(pp. 130-3) 「世界全体は不調和によって調和を保たれており、その部分の一つ一つは更にもっと特別に構成された不協和にすぎない……どの弦にもその使い方があり、その調子があり、その順番がある。アッシリア人が滅ぶとペルシヤ人が興った……一族の損失は別の民族の利益である。《世界》を維持するのは有為転変なのだ」(本詩二九行目を参照)。及び *Hemetica*, *Libellus* xvi. 9 (p. 268) 「とういのも、あらゆる種類の肉体の永遠は、変化によって維持される。」[M・七四一]。

(2) *Elixir*. 最大の〈秘薬〉は、時に、錬金術士の賢者の石と同じものとされ、卑金属を黄金に変えるのに用いられたが、生命を無限に延ばす効能を備えた精油^{エキソ}、もしくはチンキ剤も指す [F・二二一]。

(3) *greater.. lesser*. ヘンリー・ノリウスのラテン語著書『秘伝医療』即ち「健康を保持し回復する正統法」*Hemetic-cal PHYSICK: or, the right way to preserve, and to restore HEALTH*, by Henry Nollus, 1555. [M・五六一・三六一―五六一・四]を参照 [M・七四一]。

「揮発性の〈流星〉は(発散物)と通称され、乾いているか湿っているかである」と要約してある項(VI)の次の文章。

「上級の世界ではあの、〈太陽〉熱、〈星々〉の影響、及び、それら独自の特有の内部の温かさによって掻き立てられる〈水蒸気〉と〈発散物〉が、後になって種々の不思議な〈流星〉と、〈空気〉の〈領域〉と〈大地〉の内部の両方に於て不完全に混合された塊とに、物質を与えるのだ。そして〈流動する〉冷たい湿った水の性質を有する物が、常に〈雲〉〈雨〉〈霰〉〈雪〉〈霜〉及び風を産み出すが、硫黄性の熱く乾いたものは〈光輝〉〈雷光〉〈火龍〉〈稲妻の矢〉及びその他の燃える〈流星〉を発生させる。他方、下級の世界、即ち、人体にあつても同様で、あの全く同じ水蒸気と〈発散物〉とが、多くの異なった種類の〈流星〉を発生させるための物質を提供する。そういうわけで非常に多くの種々様々な〈病〉が人間を苦しめるのだ。……宇宙と人体との共通性を、ヴォーンも認めているとみられよう。

(4) 「マタイによる福音書」3・12* 「ルカによる福音書」3・17参照 [F・二二一]。* 「神が」箕を手にして脱穀場を隅々まで綺麗にし、小麦を集めて倉に入れ、殻は消すことの出来ない火で焼き払われる」。* 後半、語順が若干異なるが、使用される語彙は全く同じ文章である。

(5) ここからの四行、G・ハーバートの「焼き入れ」(一)

“The Tempter” (I) 「四行詩七連計二八行の詩、W i L・一九二一九五」の第六連を参照「M・七四二」。

「それでも御身の道を取ろう、確かに御身の道は最上なのだ／御身の哀れな債務者である私を引き伸ばしたり引き締めたりするのだから／これは唯、私の胸の調整であり／その音楽を更に優れたものにして下さる」。人間の心とキリストを楽器と看做す伝統がある「W i L・一九五」。

苦痛にはみえても実は「それはそう」「苦痛」ではない。平穩なのだ、と始まる詩で、韻を踏む二行の二十対から成る。十音節行と八音節行を主とし、六、五、四音節行が混じる何だか身を振っているような形状の作品である。

苦悶 Anguish

我が〈神〉にして〈王〉よ！ 御身に

私は跪きます、

私は我が悩める魂を屈めて迎えに出ます

我が汚れた心で 御身の尊い足許に。

投げ棄てるか踏みつけるかして下さい！ そうすれば

御身の意図されることさえ叶い、御身は讃えられました。

我が〈神〉よ、私は血を泣き喚けるでしょう

それも喜んで、

あるいは もし御身がああ、眼を通して

心を注ぎ出す〈御業〉を 私にお与え下さるなら

私はそれをすっかり使い尽して 私自らを

涙だらけにし、嘆き悲しむ湖にしてみせましょう。

おお！ 簡単な事です⁽¹⁾

書くことと歌うことは、

だが真物の偽りなき詩を書くことは

何とも難しい！ おお〈神〉様、一掃して下さい

こういう重荷を、そして我が精神にお与え下さい

心に思い描くだけでなく行動する許しを！

おお我が〈神〉よ、我が叫びをお聞き下さい、

さもなくば私を死なせて下さい！——

「M・五二六」

訳注

(1) ここからの四行は、「詩を一、二篇書くことが私の言挙げできる／賞讃の全てだ／どのような仕方でも私の状態を改善して下さい／御身はもつと多くを得られるでしょう」と始まるG・ハーバートの「賞讃(一)」『Praise』(1)「四行詩五連計二〇行の詩、Wil・二二〇—二三」を参照[M・七五二]。尚、ハーバートのこの詩については、作者自らの賞讃を「詩篇」作者の賞讃に準えており、『Verseale』「教会での交唱用短句」との地口もあるう、とウィルコックスは言う『Wil・二二二』。

因に、ヴォーンのこの簡処、「おお！簡単な事です…何とも難しい！」は、二十世紀に入ってからの英詩の進歩を論じたフェルプスの次の著書の表紙にエピソードとして印刷されている。William Lyon Phelps, *The Advance of English Poetry in the Twentieth Century*. New York: Dodd, Mead and Company, 1918.

A B B C C の型で押韻する六行(音節数は6 4 8 8 8

8) 三連を二行連句(音節数6 4)で締め括る計二〇行の作品。

この〈苦悶〉とは、「真物の偽りなき詩を書く」という「重荷」を負い続けることだった。こういう苦悶に耐えな

がらの詩作営為だったのである。その詩作に、星の輝く〈真夜中〉の「吟味」は必須だった。音節数が順に4 7 4 7 4 6 4 4 6 5 4 5 5 4 5 の一六行が、A B A B C C D E E D F F G H H G の型で押韻する二連から成る次の作品である。

1 真夜中 2 Midnight

私の〈眼〉に

(他の眼が熟睡している間)

御身の多くの情報源である

星々が 寝ずの番をしながら輝く時、

私は確かに吟味し続けるのだ

活発な〈光線〉の各々を

それがどのように働き、曲がるのかを

また 私の魂が流す光の束の

各々が同じように意気込んで

輝いて欲しいと希っている有様を、

どのような〈放射〉が

素早い振動が

そして輝かしい躍動が そこに在るのか？

どのような薄い〈噴出物〉が

冷たい〈性情〉が

そして緩やかな動きが　ここに在るのか？

2

御身の天国は（と或る人は言う）

火と燃える流体の光となり

それが絶えず混ざり合いながら

流れ出し　このように燃え上って眼に見えるのだ。

だから来て下さい　本当に！

輝いて下さい　この血の上で、

そして水を撒いて下さい　一条の光となって、

そうすれば御身は御覧に

なる筈　自らが火をつけた

両方の液体が燃え上り流れゆくのを。

おお何たる明るい機敏さが

活気に満ちた鮮烈さが

そして天上の流れが

後から後から続いて

くることが　御身の霊が

吹き飛ばすあの水の上を！

「マタイによる福音書」第三章第十一節⁽²⁾

私は　実のところ、あなたたちを悔い改めに導かんものと水で洗礼を授けているが、私の後から来る方は私よりも優れておられ、私はその方の履物を運ぶ値打ちもない。その方が聖〈霊〉と火であなたたちに洗礼をお授けになる。

「M・四二二」

訳注

(1) 集中、段落記号の付いた標題は、この作品とその次の「内容」『Content』との二篇だけ。

(2) 欽定訳版「F・一七二」。この次に「そして手に箕を持つて…」と続く。

夜 The Night

「ヨハネによる福音書」二・三⁽¹⁾

あの清らかな〈聖母教会〉によって

あの聖なる覆い、〈ツチポタル〉が輝いて〈月〉の面を照らす時のように

人々が凝視めて生きてゆけるように御身の栄光の真昼に

引かれたあのヴェイル、それを透かして

賢いニコデモは 夜 己が〈神〉を

知らせてくれる光を 見たのだった。

この上なく祝福された信仰者 彼！

だから闇と盲目のあの国で

御身の待望久しかった癒す力の翼を見ることが出来たのだ

御身が立ち上がられた時に、

そしてもはや二度と成し遂げられないことながら

真夜中に〈太陽〉と語り合ったのだ！

おお 誰が私に知らせてくれるだろうか どこで

あの死と沈黙の時間に彼が御身を見つけたのかを！

如何なる崇められた孤独な土地が咲かせたのかを

これほどまでに稀な花を、

何しろその神聖な葉の中には

〈造物主〉の豊かさが充ちていたのだから。

黄金の贖いの座でも

死んで埃をかぶった〈智天使〉でも 刻まれた石でもなく

御自らの生き生きとした仕事を我が〈主〉は保持し

それだけを貯えられたのだ

木々や香草が凝視め 覗き見し

訝っていた所に、イスラエル人が眠っている間に。

貴重な夜よ！ この世という世を打ち破るのだ、

忙しい愚か者たちは押し留め 心配事は阻止し遮って、

〈聖霊〉の日だ、我が魂の穏やかな後退だ、

それを掻き乱すものは誰もいない！

キリストの前進、彼の祈りの時、

それらに時刻時刻を合せて厳肅な〈天国〉が鐘を鳴らす。

〈神〉の無言の、限なき搜索飛翔だ、

我が〈主〉の頭に露が満ち、その髪の毛

隅々が夜の澄んだ滴で濡れる時は、

彼の静かな優しい呼び声だ

彼が扉を叩く時だ、魂は黙したままの不寝番だ、

〈精霊〉が公正な親族を捕える時は。

私の騒がしい邪悪な日々の全てが

御身の暗い〈幕屋〉と同じく穏やかで人の出入りがなく
その平和が〈御使い〉の翼か声によってしか

破られることがめつたにないなら

私は〈天国〉に長の年月ずっと

居続けて この地上を彷徨うことは決してないだろう。

しかし〈太陽〉があらゆる物を

眼覚めさせ 全てが自他共々混ざり合つて倦み
疲れている所に生きている私は 同意しては走つてゆく

泥沼という泥沼へ

それでこの世の導き下手な光によって

夜中でも犯さない過ちを 私は犯すのだ。

〈神〉の中には在るのだ (と三言う人々がいる)⁽¹⁰⁾

深遠だが眩いばかりの闇が、この地上で人々が

時刻が遅くて薄暗いと言う時のように、何故なら全てが

はつきり見えるわけではないから、

おお あの夜が欲しい！ それなら私は彼の中で
生きていられそうだと 人目につかず臆なままで。⁽¹¹⁾

〔M・五二二—二二三〕

訳注

(1) ニコデモが夜イエスの許を訪れた話は 二・三ではなく、

三・二〔F・三二三〕〔M・七五〇〕。

(2) *Nicodemus*. パリサイ人で古代ユダヤの議会の議員、キ

リストの隠れた弟子となった。「ヨハネによる福音書」

3・1—17, 7・50—52, 19・39. イエスに信服したニコ

デモは、イエスを捕えようとする人々に、我々の律法では

本人から事情を聞き事実を確かめた上でなくては判決は下

せないことになっている、と注意して嫌みを言われるし、

イエスの遺体が十字架から降ろされた時には没薬と沈香の

混ぜ物を持参して駆けつけた。

(3) 「マラキ書」4・2 「しかし我が名を恐れるあなた方の

上には、翼に癒す力を備えた正義の太陽が昇る」〔F・三

二二三〕〔M・七五〇〕。

『オリヴ山』の「太陽の沈みゆくを見ての瞑想、即

ち、真実の光への魂の高揚」の箇処の次の文章〔M・一五

一・三一—三三〕参照。「そなたの翼の下に癒す力を備えた

高潔な太陽が、我が心に昇ってくる。それに磨きをかけ、

活気づけ、大切にしよう。そこにあるそなたの光を闇の中で輝かせて、夜の死の中にあって完璧な日たらしめよう」
【M・七五〇】。

(4) 「出エジプト記」25・17―22。主がモーセに次々に告げる箇処参照。純金の贖罪所 (mercy-seat) 「神の居所とされている契約の箱 (ark of the covenant) の純金の蓋」を作らねばならぬ、翼を高く伸ばしたケルビムをその両端に作って…。

(5) ヴォーンには「夜」についての考察が、彼の他の詩にも散文にも、ラテン語の著書を彼が英訳したものの中にも、色々とみられる。例えば、「夜は、我々が眠り呆けたり怠惰に過してしまつたために作られているのではない。世の多くの人々が、現世の便宜を得ようとして夜通し目覚めているのを、我々は知っているから」【M・一四三・一一―四】
／「今こうして去ってゆく太陽は、明日は再びここに現れるだろう。だが、私の生命の太陽だと沈んだら私の許に戻つて来なくなり、天国はもはや存在しなくなる」【M・一八七・一一―一三】
／「パラケルスス [Paracelsus, 1493-1541. スイスの医師、錬金術師、医化学の祖とされる] は書いている、肉体が見張ることは魂が眠ることだ、日中は身体活動のために作られたが、夜は精神の働く時間だ」
【M・三〇五・一九―二二】
／「規則と教訓」の第二連一行目、第二二―第二三連「本小考(五)、本誌二〇三号の

一ページ、六ページ」など【M・七五〇】。

(6) 一六五五年版にはこの箇処に、ヴォーン自身の注がある。「マルコによる福音書」1・35「早朝まだ暗いうちにイエスは起きて、人里離れた所へ出て行き、そこで祈つておられた」、ルカによる福音書」21・37「それからイエスは、日中は神殿の境内で教え、夜は出て行つて〈オリヴ畑〉と呼ばれる山で過ごされた」。

(7) 「ソロモンの雅歌」5・2「私は眠っているが、心は眼覚めている、私の愛する者の声なのだ、戸を叩いて言っている、私に開けて下さい、我が妹よ、我が愛する者よ、我が鳩よ、我が純潔な者よ、私の頭は露に満ち、私の髪の毛は夜の雫でしとどに濡れているのだから、と」【F・三二―四】。

(8) His still, soft call. 「列王紀下」9・12の「静かな小声」
‘still small voice’を反響させているが、単純な一音節の語を直前の二行の精巧に仕上げられた奇想の異様さと対比させて衝撃を生み出している」【A・一〇七】。

(9) His knocking time. 「Eハネの黙示録」3・20【M・七五〇】。「見よ、私は戸口に立って叩いている、誰かが私の声を聞いて扉を開ければ私は中に入ってその人と食事を共にし、彼も私と食事をするだろう」。

(10) マーティンは、書翰の一節に言及しながら、ディオニシウス・アレオパギタではないかと示唆する【M・七五〇】。

Dionysius the Areopagite は、アテネの学者で紀元五〇年頃聖パウロによってキリスト教に改宗（使徒行伝）17・34）、近年では五〇〇年頃のシリア地方の学者の偽装とされる。

(11) invisible and dim. T・S・エリオットがこの詩句をその詩「エリオット氏の日曜の朝の礼拝」“Mr. Eliot's Sunday Morning Service”の中で、“Bun invisible and dim”として借用している「SR・一六八」。

「あらゆる宗教詩の中でも絶妙に優しく敏感な詩」[L・一五七]にして「終始、高度な水準を保つ僅かな詩のうち的一篇」[H・一六九]で「集中最もよく知られた作品の一つ」[FK・一三二]の「夜」は、「新たに生れなければ神の国を見ることは叶わない」とイエスに言われて、「年取ってからどうすれば生れることが出来るのか」と訊ねたニコデモ（ヨハネによる福音書）3・3—4）の立場を、作者が自らの立場と同一して「FK・一三四」宗教上の教化、精神の再生の本質を問題にし、啓発・覚醒を自他に希い続ける作品である。

第三、四連でニコデモは、神への信仰をどこに見い出したかを（誰が私に知らせてくれるか、とは、ニコデモに他

ならないという含意）「私」に告げるとあるが、彼と神との神秘的な結合を、葉を開く花と表現する自然への暗喩は、黄金や石と木々や香草との対比に及んでゆく。イスラエル人（ユダヤ人）が「眠っている」とは、神の新たな配慮に気付かずにいるということだが、神の「生き生きとした仕事」his own living works」は使命を果すキリストの行為であると共に創造それ自体の「生き生きした仕事」でもある[FK・一三三]。

現世の我々が、遅い時刻になって物が見え難くなると薄暗いと言うように、極く自然に（神）の中に存在するという奥深い眩く輝く闇の夜、そういう夜だったら「私」は彼「神」の中で人目につかず臙なままで生きていられそうだからと、そのような「貴重な夜」を希求・切望するのが、この作品である。その最後の二行は、フリーデンライヒの述べるように、輝かしく見える、「導き下手な光」の非現実の世界に生き、且つ、神と合体した「人目につかず臙なまま」の現実の世界に生きるという逆説の本質を表している[FK・一三三—一三四]ということになるのだらう。この論者の次の見解——ヴォーンが神秘的な経験を詩で扱う際の、再生とか個人の新たな生れ変りという主題は、個々の孤立

した精神現象ではなく絶えざる過程であり、「これほどまでに稀な花」を永遠に咲かせ続ける力動性に富む「FK・一三四」——というのは、説得力がある。

尚、ツチボタル (*Glow-worms* = *glowworms*) は、ヨーロッパのカラフトボタル *Lampyris noctilica* の幼虫、または羽のない雌で、地表で緑色がかった持続性の微光を出す。しばしば「星」を指す象徴、心象で、プリニウス(18・66 f「プレリアデス星団の子孫」)に、後には、キーツの「プシユケに寄す」(「金星、空のなまめかしいツチボタル」)や、チャプマンの「ユージニア」では嵐を予告するものとして(「天上の星々のようにびっしりと／大地の哀れな星々」へツチボタル)があまねく散在していた「などと」使われるし、「暁の先触れ」の意味でシェイクスピアの「ハムレット」(I・v・89—90「ツチボタルが朝の近いことを示して、その力なき火を弱め始める」)に現れる「*a e v*・二二七」。「夜」はこの心象とニコデモに支えられて真価を発揮しているとも見做せよう。

ABBAの型で押韻する十音節ずつの四行詩十二連に、八音節と四音節の詩行が交互にABABCCDEFEFFと押韻する十二行の一連が加わって成る。

この作品には本邦に、入念燃犀な論考「荒川」が既にあり、「松崎」と共に、筆者が眼を通した相当数の論文の中でも最も優れた二篇で、それぞれの対象作品のみならずヴォーンの世界全般の読解に必見の文献である。

*

本稿は、『火花散る燧石』全篇に収録されている類似の標題を持つ作品のうちの主な五組の実像を、なるべくそのままと筆者に感じられる状態で浮上させることに努めた。それらが、これまで取り上げた諸作品と共に、ヴォーンの世界の如何なる意味を表すかは、更に稿を改めたい。

*参考文献 本稿で直接言及したものについては文中では各文献の上に記した略記号で示す。数字はそのページ表示。

[A] Austin, Frances. *The Language of the Metaphysical Poets*. London: The Macmillan Press, 1992.

[B] Beer, Patricia. *An Introduction to the Metaphysical Poets*. London: The Macmillan Press, 1972.

[BU] Blunden, Edmund. *On the Poems of Henry Vaughan: Characteristics and Imitations*. London: Cobden Sanderson, 1927; rpt. New York, 1969.

- [㊦㊱] Blunden, Edmund. *Lectures in English Literature*. Tokyo : Kodokan, 1952, 2nd ed.
- [㊦㊲] Blunden, Edmund. *Nature in English Literature*. London : The Hogarth Press, 1949. 1st. ed. 1929.
- [㊦㊳] Bloom, Harold, ed. *John Donne and the Seventeenth-Century Metaphysical Poets*. New York, New Haven, Philadelphia : Chelsea House Publishers, 1986.
- [㊦㊴] Bradbury, Malcolm and David Palmer, eds. *Metaphysical Poetry* (Stratford-upon-Avon Studies 11) London : Edward Arnold, 1970.
- [㊦㊵] Behell, S. L. *The Cultural Revolution of the Seventeenth Century*. London : Dennis Dobson, 1951.
- [㊦㊶] Chambers, E. K., ed. *The Poems of Henry Vaughan, Student*. Introduction by H. C. Beeching. 2vols. London and New York : Charles Scribner's & Sons, 1896.
- [㊦㊷] Durr, R. A. *On the Mystical Poetry of Henry Vaughan*. Cambridge, Massachusetts : Harvard University Press, 1962.
- [㊦㊸] Empson, William. *Seven Types of Ambiguity*. London : Chatto and Windus, 1930 ; Penguin Books, 1961. 174-75.
- [邦語宗治訳 『曖昧の七つの型』 (研究社 一九七四) 三二二—三二五]。
- [㊦㊹] Fogle, French, ed. *The Complete Poetry of Henry Vaughan*. New York : Doubleday. 1964 ; New York University Press, 1965.
- [㊦㊺] Friedenreich, Kenneth. *Henry Vaughan*. Boston : Twayne Publishers, 1978.
- [㊦㊻] Gardner, Helen, ed. *The Metaphysical Poets*. London : Oxford University Press, 1961.
- [㊦㊼] *Seventeenth Century Studies presented to Sir Herbert Grierson*. London : Oxford University Press, 1938 ; rpt. New York : Octagon Books, INC., 1967.
- [㊦㊽] Gamer, Ross. *Henry Vaughan : Experience and the Tradition*. Chicago : University of Chicago Press, 1959.
- [㊦㊾] Hutchinson, F. E. *Henry Vaughan : A Life and Interpretation*. Oxford : Clarendon Press, 1947.
- [㊦㊿] Holmes, Elizabeth. *Aspects of Elizabethan Imagery*. Oxford : Basil Blackwell, 1929.
- [㊧㊱] Holmes, Elizabeth. *Henry Vaughan and the Hermetic Philosophy*. Oxford ; 1932 ; rpt. New York : Haskell

- House, 1966.
- [I 5] Hammond, Gerald, ed. *The Metaphysical Poets: A Casebook*. London and Basingstoke: The Macmillan Press, 1974.
- [I · 6] Healy, Thomas and Jonathan Sawday, eds. *Literature and the English Civil War*. Cambridge: Cambridge University Press, 1990.
- [J] Leishman, J.B. *The Metaphysical Poets: Donne, Herbert, Vaughan, Traherne*. Oxford: Clarendon Press, 1934.
- [J I] Lyte, H. F., ed. *The Sacred Poems And Private Ejaculations of Henry Vaughan*. Boston: Little, Brown and Company, 1865.
- [Σ] Martin, I. C., ed. *The Works of Henry Vaughan*. Oxford: Clarendon Press, 2nd ed. 1957.
- [Σ -] Martin, I. C., ed. *Henry Vaughan: Poetry and Selected Prose*. London: Oxford University Press, 1963.
- [Σ W] Miner, Earl. *The Metaphysical Mode from Donne to Cowley*. Princeton: Princeton University Press, 1969.
- [Σ J] Martz, Louis L. *The Paradise Within: Studies in Vaughan, Traherne, and Milton*. New Haven and London: Yale University Press, 1964.
- [Σ J -] Martz, Louis L. *The Poem of Mind: Essays on Poetry/English and American*. New York: Oxford University Press, 1966.
- [Σ =] Martz, Louis L. *The Poetry of Meditation: A Study in English Religious Literature of the Seventeenth Century*. New Haven and London: Yale University Press, 1962. 1st ed. 1954.
- [Δ] Pettet, E. C. *Of Paradise and Light: A Study of Vaughan's "Silex Scintillans"*. Cambridge: Cambridge University Press, 1960.
- [Δ] Richmond, H. M. *Renaissance Landscapes: English Lyrics in a European Tradition*. The Hague: Mouton, 1973.
- [6] Simmonds, James D. *Masques of God: Form and Theme in the Poetry of Henry Vaughan*. Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 1972.
- [6 Δ] Schuchard, Ronald, ed. *The Varieties of Metaphysical Poetry By T. S. Eliot/The Clark Lectures at Trinity College, Cambridge, 1926 and/The Turnbull Lectures at*

- The Hopkins University, 1933.* London : Faber and Faber, 1993. 「ロナルド・シムホーン編注『T・S・エリオット クラーク講演』村田俊一訳（松伯社 二〇〇一）」。
- [S・V] Spencer, Theodore, and Mark Van Doren. *Studies in Metaphysical Poetry: Two Essays and A Bibliography.* Port Washington, N. Y. : Kennikat Press, 1939.
- [T] Tuve, Rosemond. *Elizabethan and Metaphysical Imagery.* The University of Chicago Press : 1947 ; rpt. Phoenix Books, 1961.
- [W] Whittier, John Greenleaf. *Anti-Slavery Poems : Songs of Labor and Reform.* London : Macmillan and Co., 1889.
- [W①] Williamson, George. *The Donne Tradition : A Study in English Poetry from Donne to the Death of Cowley.* New York : The Noonday Press Inc., 1958. 1st ed. 1930.
- [W②] Williamson, George. *A Reader's Guide to the Metaphysical Poets.* London : Thames and Hudson, 1968.
- [WH] White, Helen C. *The Metaphysical Poets : A Study in Religious Experience.* New York, 1936 ; rpt. New York : Collier Books, 1966.
- [W-J] Wilcox, Helen, ed. *The English Poems of George*

Herbert. Cambridge : Cambridge University Press, 2007.

[V] Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery.* Amsterdam・London : North-Holland Publishing Co., 1974.

【荒川】 荒川光男「黙想詩「夜」を読む」（『十七世紀英文学のポリティックス』十七世紀英文学会編、金星堂、一九九〇。一八一—一九七）

【川崎1】「ヘンリー・ウォーンの自然神秘主義」（川崎寿彦『薔薇をして語らしめよ—空間表象の文学』名古屋大学出版会、一九九一。一七四—一九八。）

【川崎2】川崎寿彦『鏡のマネリスム—ルネッサンス思想力の側面』研究社、一九七八。一五二—一五八。

【松崎】松崎毅「ルーパート王子と「鷺」——ヘンリー・ウォーンの世俗詩と検閲をめぐる論考——」（『十七世紀と英国文化』十七世紀英文学会編、金星堂、一九九五。一七二—一九二）

拙訳での「〜付きと」チック体は、原詩ではそれぞれ大文字で始められる語句とイタリック体部分である。

*本稿は二〇〇八年度成城大学文芸学部特別研究助成による成果の一部である。